

聴診記

海外交流・国際性

第64号・令和5年9月



慶應義塾大学医学部内科学教室同窓会

米国留学の思い出

村 上 円 人

(昭和 59 年卒 63 回生)



現在、医学教育統轄センター会議に参加し、医学生の海外交流の充実ぶりを知り、門川俊明先生を始め関係者の皆様に敬意を表したいと思います。

今回は 1993 年から 2 年間の米国留学経験をご紹介します。私は腎研の猿田亨男先生のご指導のもと RA 系に関する生理学的研究を行い、AHA 口演発表や英文誌掲載等を経て、厚生省公費留学生（ヒューマンサイエンス財団）として米国クリーブランドクリニックの Dept. of Heart and Hypertension へ赴任しました。RA 系の権威 Bumpus 先生が率いる日本人不在の PhD 中心の研究室でした。研究テーマは Ang I から Ang II を産生する chymase の Baculovirus による大量発現と精製でした。それから生化学の知識と英会話力が乏しい小生の孤独な戦いが始まりました。同テーマで既に研究中の同僚が難航するなか、新しい Baculovirus vector (pBlueBacM) を独自に開発し pro-chymase の大量発現に成功後、DPPI で pro-chymase が chymase に転換することを証明し chymase 大量精製に成功。10 ヶ月に及ぶ孤独で創造的な経験でした。その後 Bumpus 先生が急逝なさり、pBlueBacM の特許権を譲り、論文をまとめ帰国の途につきました。

帰国後の勤務先だった日野市立病院の近隣にある T 社・創薬研究所の所長に、米国での研究を評価いただき勧誘され、そこでの chymase 精製と拮抗薬開発に関与しました。開発した拮抗薬は有意義な効果がなく商品化されず、この研究に終止符を打ちました。その後、1997 年の豪州での国際腎臓学会においてシンポジストとして 30 分間の招待講演をいたしました。留学により日本文化を再認識し、家族との絆が深まりました。そして独りでも挑戦し続ける力を得て、現在の病院長業務にも大変役立っております。

佐野厚生総合病院 病院長、研修センター長、透析センター長

慶應義塾大学非常勤講師（内科学教室）

慶應義塾大学客員教授（医学教育統轄センター）

1988 年から猿田亨男教授に師事し腎臓内分泌代謝内科医のキャリアを始める。1993 年に米国クリーブランドクリニックに公費留学後、22 年間にわたり日野市立病院に勤務し、新病院設立に尽力し、副院長、研修センター長、透析室長、情報システム管理室長として臨床・人材育成・病院システム構築に従事し、2017 年より現職。その後、医師、医学生、コメディカルの人材育成に取り組み、医師および看護師不足は回復し、経営健全化、地域医療構想構築、イノベーション導入に尽力する。日本透析医学会評議委員として専門医試験の本部委員を務める。